

会議名	地域農業確立総合研究「関東地域における飼料イネの資源循環型生産・利用システムの確立」及び飼料イネ研究連絡会平成 19 年度合同現地検討会
開催日時	平成 19 年 9 月 3 日(月)13:00～4日(火)11:45
開催場所	・現地圃場:(千葉県旭市干潟)、・現地視察:(香取市山田)、・検討会:(旭市 東総文化会館小ホール)
主催者	(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター (飼料イネ研究連絡会幹事長)・(地域農業確立総合研究「関東飼料イネ」推進責任者)千葉県畜産総合研究センター
参加人数(概数)	約百数十名(外部評価委員、農水省、研究参画関係・研究連絡会 52、独法 21、千葉県行政・普及関係者 84、その他、
1. 会議の概要	<p>海外に依存している飼料穀類と乾草の価格が高騰し、自給飼料生産拡大の要請が大きくなっている。平成 12～17 年度の「稲発酵粗飼料」を引き継いだ農水省のプロジェクト研究「粗飼料多給による日本型家畜飼養技術の開発(えさプロ)」関連プロジェクト“飼料イネ研究連絡会”と“関東飼料イネ”の 19 年度合同現地検討会が開催された。</p> <p>9 月 3 日 「現地飼料イネ栽培状況について」(千葉県旭市干潟)13:30～14:45 挨拶;旭市長、幹事長、推進責任者</p> <p>1. 「現地飼料イネ栽培状況について」(千葉県畜産総研セ 鈴木 一好)</p> <p>飼料イネは旭市の水稻農家が栽培し、コントラクターが収穫・調製し、需給調整を旭市農水産課が行って県内畜産農家に広域流通。栽培面積は平成 15 年度をピークに減少、18、19 年度はやや増加している。</p> <p>2. 「収穫実演と説明」</p> <p>高品質な稲発酵粗飼料を調整できる自走裁断型飼料イネ専用収穫機の開発と性能評価 (中央農研 井尻 勉)</p> <p>従来型と並べて実演され、改良型の刎損失は見た目にも減っている。(平成 20 年度から市販予定とのこと)。</p> <p>ロールベイル運搬装置「ロールキャリア」による収穫作業の効率化 (中央農研 元林 浩太)</p> <p>ロールベラの後部に装着し、作業能率 35%向上が可能とのこと。</p> <p>3. 現地視察「バイオマス現地」:(香取市山田)16:00～17:15</p> <p>平成 16～18 年度農水省技術会議委託による研究組合(農工研ほか)の「バイオマス多段階利用システムの構築及び実証に関する研究」で開発された試験プラントの視察、および現在はそのプラントを使って牛舎排泄物と加工野菜屑を原料として生産されるメタンガスの自動車燃料化と作物栽培への液肥利用試験の状況についての説明を聞いた。</p> <p>4. 検討会:(旭市 東総文化会館小ホール)9 月 4 日 9:00～11:25</p> <p>千葉県挨拶(畜総研センター長);県内飼料作面積はピーク(昭 60)から半減、県内畜産生産の額とシェアも後退傾向だが、このプロジェクトで新しい芽も芽生えてきている。</p> <p>(1)飼料イネのユーザー評価向上の課題 (中央農研セ 千田 雅之)</p> <p>・飼料イネ生産定着化の方向;生産コストと生産評価の著しいギャップ 多額の助成</p>

	<p>必要 = 普及の限界、ギャップ縮小効果は反収増加、ユーザー評価向上の実効性が高い、運搬～堆肥還元の労働軽減。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユーザー(畜産農家)から見たイネWCSの評価と問題点;品質、供給量、運搬給与。 ・ユーザー評価向上に向けた課題と具体的対応;品質向上、収穫ロス低減、諸作業の低コスト化、イネWCSの現地給与、飼料イネの放牧利用。 <p>(2) 品種、栽培方法の工夫による飼料イネ収穫適期の拡大技術 (中央農研 石川 哲也)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早晚性の組合せ、・複数の作期、・複数の栽培法。 <p>(3) 美里町における飼料用イネの取り組みと利用への今後の課題 (埼玉県美里町 金子 節子)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼料イネを基幹とした水田農業ビジョンづくり、・耕畜連携の推進(コーディネーター)、・今後の課題(堆肥の地域内循環、収穫機械の整備、適期収穫、土作り、飼料イネ給与畜産物のブランド化)。 <p>(4) 稲発酵粗飼料の長期保存技術について (千葉県畜総研セ 細谷 肇) サイレージ発酵の高品質化とカビの抑制が重要であり、梱包密度が不十分な条件下で乳酸菌添加、尿素処理は有効。</p> <p>(5) 稲発酵粗飼料の品質評価(成分分析)のサンプリング方法について (中央農研 石田 元彦)</p> <p>5. 総合討論 11:25～11:45 司会; (中央農研 石田 元彦)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イネWCSの冬季圃場(放牧)給与、収穫適期拡大、カビ毒、栽培方法とサイレージ品質の関係、などについて検討された。
<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>稲作との耕畜連携システムの構築に必要な技術とシステムの開発として、・イネWCSの冬季圃場給与、・飼料イネの放牧利用、・飼料米多収品種の開発、・耕畜連携推進のための組織作りとコーディネーターの育成、などがあげられる。</p>
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>現地視察で訪れた研究組合が開発した「バイオマス多段階利用システム」プラントの余剰蒸気利用の「水蒸気爆砕装置(日東高圧株)」は、250・25気圧まで加熱できる蒸煮用釜を2台連結して自動連続運転が可能な装置である。木質飼料(広葉樹などに限られるが)製造用のプラントとしての利用できる可能性は大きいとみなされた。先年、機械装置の開発で失敗した生研機構出資事業のプロジェクト研究における木質利用と飼料化技術の成果を活用できる見込みがあり、検討に値すると考えられる。</p>

<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>現在、農水省の委託研究プロジェクト「えさプロ」では、飼料イネ品種および多収穫技術の開発、寒冷地における飼料用稲を基軸とした自給飼料多給型肉用牛生産技術の開発、暖地における飼料イネを基軸とした発酵TMR生産・利用技術の開発と広域流通・連携システムの構築、などの研究開発が進められている。一方、地域農業確立総合研究として、北陸における高品質大麦 飼料用イネ輪作システムの確立、関東地域における飼料イネの資源循環型生産・利用システムの確立、中国中山間における飼料用稲を基軸とする耕畜連携システムの確立、の多彩なプロジェクト研究が実施されている。これら一連の飼料イネ関連の研究開発は軸足の一方を耕種と農業機械開発に置いており、畜産生産現場からの問題解決には一定の限界もあるように思われる。公募した研究開発課題の採択に当たっては、この辺りに留意し、畜産経営現場の視点からの評価が必要であろう。</p>
<p>5 . 会議の所感</p>	<p>昭和 40 年代、わが国で歴史上初めてコメの過剰・生産調整の問題が生じた当時から、水田転換の必要面積は百万 ha 以上と見なされていた。以来、現在までに幾多の施策が行われ、飼料利用と飼養管理に関するイネの技術的な問題点は基本的にほぼ解決されているに関わらず、水田の耕作放棄地は増え続け、飼料自給率も低下する中で稲発酵粗飼料活用の施策と研究開発が協力的に推進されても飼料用稲の栽培面積が五千 ha を越すことは容易でなく、稲発酵粗飼料での問題解決の困難なことが実証されたと言えよう。一方、わが国の文化と歴史的、社会経済的などの理由で否定されてきたコメのエサ利用について、また再び現実味を帯びてきた食料・飼料輸入の限界論やバイオ燃料原料ニーズを背景に、稲作・水田の保全・振興のためにコメの飼料化についても国民的同意が得られる気配を感じさせられる。</p> <p>このような状況の中で当面取り上げられるべき稲作の研究開発課題としては、「飼料用子実の生産利用と飼料仕向け稲ワラの利用システムの構築」が採り上げられるべきと考えられる。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>